7 月 3 日のメッセージ

聖書：使徒言行録　13：　1 – 12

「神の言葉を告げ知らせた」

アンティオキアの教会で人々が祈り、断食していると、聖霊が「バルナバとサウロをわたしのために選び出しなさい」(使徒言行録 13:2)と告げたといいます。もちろん、神の決めたことだからと、すぐに二人のために祈り、手を置いて出発させました(使徒言行録 13:3)。

ふと思います。皆、本当に心から喜んでいたのだろうか、と。

バルナバが選ばれるのはわかります。「バルナバは立派な人物で、聖霊と信仰とに満ちていたからである」(使徒言行録 11:24)。すでに多くの者を信仰へと導いた実績もあります。

しかし、サウロはどうでしょう。つい先日まで迫害する側の人間でした(「さて、サウロはなおも主の弟子たちを脅迫し、殺そうと意気込んで、……」使徒言行録 9:1-2)。たしかにダマスコで回心して、主を宣べ伝えたとは聞きます。だが、どこまで信用できるのか。そう思う者がいても不思議ではありません。

一方、サウロが選ばれたことで安堵した者もいただろうとも思うのです。宣教の道のりは厳しいものです。いくら主の命令といえども、辛いものがあります。そこに向かわずに済んだ、と胸をなで下ろした者もいたかもしれません。どちらの立場のことも聖書は記してはいません。

ただ、同時にこうも思うのです。憤った彼らも、安堵した彼らも、次の機会には選び出されていたかもしれない、と。

なぜなら、神は突然、何の関係もないと思っていた者を選び出される方だからです。例えば神は、家畜を飼う者として一生を終えるつもりだったアモスを選び出されました(「……主は家畜の群れを追っているところから、わたしを取り、『行って、わが民イスラエルに預言せよ』と言われた。」アモス書 7:14-15)。詳しくは書かれていませんが、選ばれたアモスは神の言葉に応える者となりました。

また、12 人の弟子たちは、イエスに命じられるまま、二人組で宣教の旅へと出かけることになりました(「そして、十二人を呼び寄せ、二人ずつ組にして遣わすことにされた。」マルコによる福音書 6:7)。たとえ 12 人の弟子たちといえども、最初からそのように心づもりしていた者ばかりではなかったことでしょう。

それでも、神は一人ひとりに「わたしが前もって(二人に)決めておいた仕事に当たらせるために」(使徒言行録 13:2)選び出されるのです。それは、苦難の中で助けを求める声に応えるためです(「苦難の中から主に助けを求めて叫ぶと／主は彼らの苦しみに救いを与えられた。」詩編 107:19)。そのために聖霊は一人ひとりに神の言葉を託して、それぞれの場所へと送り出すのです(「主は御言葉を遣わして彼らを癒し／破滅から彼らを救い出された。」詩編 107:20)。

しかも、特別な人だけが選ばれるのではありません。若い人だけが選ばれるのでもありません。全ての者を神は選び、その宣教の業へと送り出そうとされています。送り出されたバルナバとサウロは「サラミスに着くと、ユダヤ人の諸会堂で神の言葉を告げ知らせた」(使徒言行録 13:5)。

「その時」は突然やってきます。大きな場面だけでなく、日常会話の中の小さな場面にも。どんなときにも主に信頼しつつ信仰を伝える私たちでありたい。主の召しに応える私たちでありたいと願うのです。